
僕と柳と子猫

kakio

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と柳と子猫

【Nコード】

N2244F

【作者名】

kakio

【あらすじ】

僕と柳は公園に行く途中に猫と出会う。

太陽が全てを溶かすように思えた真夏の午後、僕と柳は待ち合わせをしていた。

といつても、かなり昔の事だから、正確なことなんて分かるはずもない。

でも、確かに言える事はその待ち合わせをした日、僕等は、いや、少なくとも僕は強烈に胸に焼きけられた何かがあった。

ディテールは不明瞭で不確かだとしても、何物かが僕の体に、確かに根をはった。

そんな経験を共にした柳とも、10年以上前に別れてそれっきりだ。

何をしているだろうか？と思わなくもない。

だけど、二人で一緒に経験した物事の中で、何事にも変えて、胸に突き上げてくるのはあの日のことだ。

僕は語ることが出来るだろうか？

世界の全てが明るく照らし出されているのではないか、と思える8月の午後、僕は柳の所へ向かっていた。

柳の暮らすマンションは、僕の家から100メートル程先にあり、「エメラルド」と呼ばれていた。

僕には宝石のような美しさなど微塵も感じられなかったが、皆が言うならそうだろうとそれに倣っていた。

「エメラルド」の101号室のチャイムを鳴らし、応答を待つ。

「あータツ？ちょっと待て」

達俊の頭をとってタツ。柳田の頭をとってヤナギ。
まあ子供のあだ名の付け方なんてそんなものだ。
というか、大人だって大して変わらない。

柳はいわゆる「鍵っ子」というやつだった。

今もそういうのか分からないが、親が共働きで、首にいつも鍵をぶら下げていた。

青いゴムだか紐だかに通した鍵を、ネックレスのように身に着け、もはや体の一部と言っていていぐらいに馴染んでいた。

「さーて。今日は何しよっか？」。鍵を掛けながら、柳は言った。

「うーん。どうしよっか」。とりあえず公園でも行く？」と僕。

やることないときはとりあえず公園へ。

その頃の僕らは、「公園」という言葉を体に刻み込まれたごとく、暇さえあれば公園に遊びに行った。

特に心躍るような素晴らしい体験が待っていたというわけではない。
い。

名前の分からない木が側面に植えられ、その下の地面は日が当たらないため、いつもじめじめしていた。そのせいか、夏はやたら蚊が多い。

全体は野球場のような形をしていて、入り口がちょうどホームベースの位置だとすると、

ライト20メートル、センター50メートル、レフト30メートルといった具合に、かなり歪な感じがした。

だが、町内会のソフトボールの練習にも使われていたので、問題は特に無かったのかも知れない。

定番とも言える滑り台、ブランコ、砂場があり、所々にベンチがある。

全国の公園と比べてみても、おそらく特に優れた点は見つかりはしないだろう。

そうは言っても、近いというだけで、駆けつける頻度が増え、そしてそれ故に愛着がでてくるものだ。

そもそも、他に行く所なんてまるで思い付けやしなかった。

僕と柳はゆったりとした調子で、のんびりゆっくり公園へ向かった。

たいした距離じゃない。

普通に歩いていけば15分ほどだ。

特に急ぎの用事もない僕らが慌てる必要なんてないので、セミのうわんうわん唸る鳴き声を聞きながら話し出した。

「タツは宿題終わったの?」「いや、まだ。ヤナギは?」「あんなの早く終わらせちゃいなよー」「そうなんだけどなーやる気起きないんだよなー」「しょうがないなあー今度家に持ってきてきなよー」「やってくれんの?」「バカ、あんたがやんのよ!」

としょうもない話をしている時に、柳がいきなり「あれ見て」と指を指した。

小さな子猫がいた。

半端なく小さい。

僕はダツシユで近づいてあいさつした。「こんにちは」

人に慣れているのか、全く逃げるそぶりを見せない。

後から来た柳は「かわいいー」とか言いながら頭をなでている。

首輪がないということは捨て猫?こんな可愛い子見捨てるなんて許せないと柳。

野良猫が生んだかもしれないと僕。

僕と柳はどうしようかと一時迷う事になる。

どうしようかと話してる最中に子猫がフンをした。

そのフンの中に寄生虫が数匹蠢いていた。

ミノムシみたいな奴がやたらめったら動き回っている。

僕と柳は完全にフリーズ。

声がない。

この小さな体の中に、凄まじいほどの戦慄を抱かせる寄生虫が巣くっているという事実を認めることができない。

子猫が「ニャー」と鳴いた。

僕と柳は顔を見合わせる。

言葉が出てこない。

どちらからともなく、家の方へ足を向ける。

無言。

振り返ると、こちらへ歩いてくる子猫が。

僕と柳は歩いては振り返り、振り返っては歩いた。

子猫は僕等のほうへわずかだが着実に確固たる意志を持ったように歩いてくる。

もちろん、距離が縮まるはずはない。

視界から消える。

僕等はどんな言葉を掛け合えばいいのか分からず、無言のまま別れた。

それ以降、この事を話題にして話す事もないまま、僕と柳も別れてしまった。

圧倒的なおぞましさ、それを愛する人が知らず知らずのうちに心に秘めている時、僕はそれを引き受け、全てを包み込む事が出来るのだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2244f/>

僕と柳と子猫

2011年1月26日03時54分発行